

「Günther Bornkamm による 編集史批判的研究」についての考察

大 宮 謙

1. はじめに

Günther Bornkammは¹、編集史批判と後に呼ばれる研究方法を初めて新約聖書学に適用した研究者であり²、その具体的なアプローチをマタイ福音書における「嵐静め」を分析した短い論文で提示する³。本論では、この「嵐静め」につ

1 BornkammはTübingen大学でErnst Käsemann、Göttingen大学でRudolf Bultmannに学び、自身は主にHeidelberg大学で教授として新約聖書を講じた。Bornkammの主な著作としては、本論で取り上げる論文（註3参照）に加えて、善野碩之助訳、『ナザレのイエス』新教出版社、1972年改訂増補版（初版は1961年）、また『ナザレのイエス』に収録された「信仰にとっての史的イエスの意義」を挙げ得よう。

2 「編集史」という呼称は、W. Marxsenが命名者である。W. マルクスセン、辻 学訳、『福音書記者マルコ 編集史的考察』日本キリスト教団出版局、2010年、iii に拠れば、マルクスセン自身は「問題設定への刺激をG. フォン・ラートの五書研究から取り出した」という。また、「エルンスト・ローマイヤーのそれ〔問題設定〕を継承し、発展させている」という。さらに、「訳者あとがき」には、Marxsenが「編集史」という研究方法の「名付け親」であることが明記されている。ただし、N. ベリン、松永希久夫訳『編集史とは何か』ヨルダン社、1984年、57頁は「われわれが最初に、厳密な意味での編集史研究に出会うのは、彼〔ボルンカム〕の業績においてである。」と述べる。

3 Günther Bornkamm, “The Stilling of the Storm in Matthew” in *Tradition and Interpretation in Matthew* (Günter Bornkamm, Gerhard Barth and Heinz Joachim Held) translated by Percy Scott, London: SCM Press, 1963, pp. 52-57. *Tradition and Interpretation in Matthew*（以下TIMと略記）のPrefaceに拠れば、この論文は当初、ベテル神学校紀要『言葉と奉仕 *Wort und Dienst*』（1948年、49-54頁）に掲載され、後に本書TIMに収録された。中表紙、目次も含めた全299頁中この論文はわずか6頁である。同書はBornkammのもう一つの論文“End-Expectation and Church in Matthew”（37頁）に加え、彼の2人の弟子Gerhard Barthの“Matthew’s Understanding of the Law”（107頁）、Heinz Joachim Heldの“Matthew

いての歴史的な論文を概観し、その上で考察を試みたい⁴。

2. 新約聖書研究および共観福音書積義の原理全般

論文の冒頭でBornkammは、新約聖書研究および共観福音書積義の原理全般として、福音書は「ナザレのイエスの伝記でなくケリュグマという観点から理解され解釈されねばならないこと」、「内容、様式、詳細部がイエス・キリストへの信仰に基づいて定められ形成されたこと」、これらが共通理解になりつつあり、それは様式史研究に負うところが大きいことを確認する⁵。また、様式史研究の成果として、「教会の信仰によるいかなる種類の『上塗り overpainting』も無い純化された所謂イエスの生涯」を福音書から抽出し得るかのような「長きに渡って批判的研究を支配してきた虚構に終わりをもたらした」ことを挙げる。さらに、「十字架刑を受け復活したイエスへの信仰は、伝承の新しい層では決してなく、そこから伝承が湧き出て成長した最も基礎となる場所」だと論じる⁶。

3. 原始キリスト教伝承の二つの特徴

Bornkammは、原始キリスト教伝承の特徴として、次の二つを挙げる。一つには、イエス伝承を良心的に誠実に保存するための明瞭な労苦が見られること、もう一つには、この伝承が詳細部において特別な自由さを持つことである⁷。また、「福音書記者はイエスの言動を伝える際に、ある種の教会の『古記

as Interpreter of the Miracle Stories” (135頁) という、いずれもHeidelberg大学に受理された博士論文 (1955および1957年) を収録する。なお、ペリン、前掲書、62頁は、Bornkammの弟子としてさらにHeinz Eduard TödtとFerdinand Hahnの名を挙げる。

4 Bornkammを引用する上で必要に応じて論者が語を補った部分は〔 〕で明示する。

5 Bornkamm, op. cit., p. 52。

6 *Ibid.*, p. 52。

7 *Ibid.*, p. 52。私見では、興味深いことに、ここで挙げる二つの特徴は「口述伝承」の

録archives』に遡ることなく、教会のケリュグマから引き、このケリュグマに仕えた」という。と言うのも、「イエスは過去の人物でなく、従って美術館の作品でない故に、そこにイエスが保存されているイエスについての原始キリスト教伝承の『古記録』はあり得ない」からだという。

4. 「嵐静め」のマタイにおける文脈および表現による新しい意味の付与

以上のように原始キリスト教伝承についての全般的な理解を示した上で、福音書記者の執筆方法を明らかにする事例としてBornkammは「嵐静め」(マルコ 4:35-41、マタイ 8:23-27、ルカ 8:22-25)を取り上げる。

まず、マルコとルカが同じ文脈にこのペリコーペを置いていることを確認する。それは、「種を蒔く人」の喩え、「灯」の喩えに続く流れということになる⁸。一方、マタイはマルコ 1、2、4、5章にある奇跡物語を山上の説教の後に

[マルコの順番には従わずに]置くが[マタイ 8-9章]、その一連の奇跡物語群の中に、「嵐静めという自然奇跡」も含まれることをBornkammは確認する。そこは「5-7章〔の山上の説教〕に既に現われた『ことばのメシア』の提示の後に『行為のメシア』を説明する・・・一連の癒しの奇跡が排他的では無いが顕著な中」である⁹。

特徴としてしばしば指摘されるものである。いわく「基本的な忠実さと詳細部の自由さ」である。拙論「『イエス伝承』に関する一考察——口頭伝承過程を中心として」、青山学院大学宗教主任研究叢書紀要『キリスト教と文化』(31)、29-51頁(特に31頁)参照。なお、Bornkamm, op. cit., p. 52 n.1は、自身の『ナザレのイエス』、15-32頁を参照箇所の一つに挙げる。

8 ただし、マルコでは、「灯」の譬えの次に「秤」、「成長する種」、「からし種」の譬えが続く(4:24-32)。この点はBornkamm自身、「ルカには一部しか並行記事がない」と認めている。また、ルカでは「嵐静め」の直前に、「マルコとマタイでは別の文脈にあるイエスの本当の血縁(神の言葉を聞いて行く人々)についてのイエスの言葉」が在ると指摘する(*Ibid.*, p. 53)。

9 *Ibid.*, p. 53。なお、マタイでは「種を蒔く人」の喩えは13章に置かれる。また、「同じ文章が導入(4:23)と結び(9:35)に使用されているという事実」に着目し、Bornkammは5-9章(5-7章は「ことばのメシア」、8-9章は「行為のメシア」)を一纏まりのものと解す。

このように「嵐静め」の文脈を確認した上で、マタイにとっては「嵐静め物語」の性質は「自然奇跡」であることに留まらず、マタイの文脈および表現によって、「他の福音書記者が持たない新しい意味が付与」されているとBornkammは指摘する。そして、この「新しい意味」を明らかにしていくのであるが、まずは比較のため、この物語のマルコ版が、マタイ版よりも「より強く直接に奇跡物語という性質を帯びている」と指摘する¹⁰。

マタイ版でも、こうした「奇跡物語という性質」が完全には棄却されていないことを確認しつつ¹¹、Bornkammはマタイ版が「新しい動機（意味）」に仕えるために施した「特徴的な仕方の修正」に注目する。

一つは文脈についてであり、マタイ版だけが「この物語」の直前に「師に従う弟子のあるべき姿 discipleship」についての二つの言葉を置く（8:19-22）¹²。しかも、これらの言葉はἀκολουθεῖν「従うこと」に関連しており、さらに、マタイ版にのみ、καὶ ἐμβάντι αὐτῷ εἰς τὸ πλοῖον ἠκολούθησαν αὐτῷ οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ「そして彼（イエス）が舟に乗ると、彼の弟子たちは彼に従った」というἀκολουθεῖνを含む言葉が現れるという¹³。

そしてBornkammの理解に拠れば、「この物語」に先行する二つのイエスの言葉（8:19-22）は「嵐静めにおいて起こったことの意味を説明する」という¹⁴。

10 *Ibid.*, pp. 53-54. 具体的には「海での嵐と危険、舟の艦でのイエスの眠りが明瞭で詳細に描かれる」こと、「イエスを起こす際の弟子たちの問いが、信仰深い響きでなく、極めて冒瀆的な『主よ、我々が滅んでも構わないのですか』である」こと、「風に『静まれ』と命じるイエスの言葉とその奇跡的效果が続く」こと、「弟子たちを恥じ入らせるイエスの問い」、「弟子たちの畏れと驚き」を挙げる。

11 例えば*Ibid.*, pp. 54は、冒頭（8:24）のσεισμός μέγας「大きな嵐〔文字通りには「揺れ」〕」と末尾（8:26）のγαλήνη μεγάλη「大きな風」の対照を「奇跡物語という性質」の一つに挙げる。

12 ルカ版（9:57-62）では「師に従う弟子のあるべき姿」についての言葉は3つに増え（ルカ9:61-62をマタイ版は欠く）、異なる文脈に置かれる。

13 *Ibid.*, p. 54.

14 *Ibid.*, p. 55. 続けてBornkammは「もちろん（マタイ）8:23のἀκολουθεῖνは、第一義的には付いて行くという単純な意味を担うだろうが、同時に先行する言葉（8:19f, 21f）によって、より深く象徴的な意味を与えられている」と付言する。すなわち、「イエスに従うこ

5. 最古の釈義家にして最初の解釈者マタイ

ここまでの考察を踏まえて、Bornkammは、「もしこの観察が正しければ、それはマタイがこの物語〔伝承〕を受け渡す者hander-onであるだけでなく、その最古の釈義家であり、最初の解釈者でもあることを意味する」と述べる¹⁵。すなわち、「嵐の中での弟子たちのイエスと共なる旅および嵐静め」を「弟子のあるべき姿」すなわち「教会という小さな舟」と関連付けてマタイは解釈しているということである。つまり用語としては明示的でないとしても、Bornkammはマタイを「編集者」と解していることになるであろう。

さらに、「弟子たちが助けを求める〔イエスへの〕呼び掛けの言葉」について、マルコ版が $\delta\iota\delta\acute{\alpha}\sigma\kappa\alpha\lambda\epsilon$ 「先生」、ルカ版が $\acute{\epsilon}\pi\iota\sigma\tau\acute{\alpha}\tau\alpha$ 「師」と、いずれも「人への尊称」であるのに対し、マタイ版では $\kappa\acute{\upsilon}\rho\iota\epsilon$ 「主」であり、こちらは「人だけでなく神への尊称」であるとBornkammは指摘する。マタイ福音書全体の $\kappa\acute{\upsilon}\rho\iota\epsilon$ の用例を踏まえれば、ここでの「弟子たちの叫び」は、「祈り」であると共に「イエスとの師弟関係の告白confession of discipleship」であるという¹⁶。すなわち、ここでの $\kappa\acute{\upsilon}\rho\iota\epsilon$ にも福音書記者マタイの「師に従う弟子のあるべき姿」を描く筆を読み取ることができるということである¹⁷。

とに伴う苦難とその中での助け」が含意されているのであろう。

15 *Ibid.*, p. 55.

16 *Ibid.*, p. 55. Bornkammはマタイの用例の中から、7:21-22; 8:2, 6, 21; 14:28, 30; 16:22; 17:4; 18:21; 24:42; 25:37, 44; 26:22 に言及する。

17 Paul Frederick Feiler, “The Stilling of the Storm in Matthew: A Response to Günther Bornkamm”, *Journal of the Evangelical Theological Society*, 26 no.4, Dec. 1983, p. 400 は、マタイ版の「編集の手」としてBornkammが3つの点を挙げると指摘する。すなわち、 $\kappa\acute{\upsilon}\rho\iota\epsilon$ という呼び掛け、「非難の言葉→奇跡」という順番、驚きの声を上げる主体が「人々 $\acute{\alpha}\nu\theta\rho\omega\pi\omicron\iota$ 」と明示されることである。なお、Feilerが挙げる第2、第3の点については本論では「6. マタイの構成の特殊性」で取り上げる。

6. マタイの構成の特殊性

さて、このペリコーペにおける更なるマタイの編集の筆、Bornkammの表現では「マタイの構成の特殊性peculiarity of Matthew's construction」は、「弟子たちに対する非難の言葉」と「奇跡自体」の「順番の入れ替え」に見られるという¹⁸。すなわち、マルコ版、ルカ版での「奇跡 → 非難の言葉」の順番が、マタイでは逆になる。つまり、マタイ版では、「自然の諸要素が沈黙させられる前に、従って死の恐怖の只中で、イエスの〔非難の〕言葉は弟子たちに発せられ、彼らの小さな信仰が恥じ入らせられる」¹⁹。しかも、ここでの「非難の言葉」にὀλιγοπιστία(あるいはὀλιγόπιστος) というマタイの好む表現を用いることで、問われている状況に変化が生じたという²⁰。

すなわち、マルコ版 (οὐπω ἔχετε πίστιν; 「まだ、あなたがたは持たないのか、信仰を」) では、ここでの特定の状況での弟子の態度が問われたが、マタイ版では、「師に従う弟子のあるべき姿」全般がそこに現れる典型的な事例としてここでの状況が捉えられているという²¹。

もう一点、マタイの編集の筆についてBornkammが言及するのは、ペリコーペ末尾において、起こった出来事に驚きの声を上げる主体が、マタイ版のみ

18 *Ibid.*, p. 55。

19 *Ibid.*, p. 56。

20 Bornkammは「ルカ 12:28 を除き、マタイはὀλιγοπιστίαを使用する唯一の福音書記者であり (6:30; 8:26; 14:31; 16:8; 17:20)、この語は嵐で (8:26; 14:31)、また心配で (6:30; 16:8) 麻痺する弱すぎる信仰をいつも示し、悪魔的な力に抵抗するには十分成熟していない信仰の現れを顕わにする (17:20)」と述べる。

21 さらにBornkammは、ペリコーペの導入部でマタイが嵐の天候 (マルコ版λαίλαγ μεγάλη άνέμου 「大きな嵐」) を表現する際に、「湖の嵐には極めて異例ながら黙示的恐怖の表示としてはしばしば現れる σεισμός μέγας (マコ13:8 //マタ24:7//ルカ21:11; マタ27:54; 28:2; 黙示6:12; 8:5; 11:13,19; 16:18)」を用いることが「偶然では有り得そうにない」と述べる。また、湖での弟子たちの〔助けの〕必要が「弟子のあるべき姿」全体に関連する困難の象徴となるように、イエスの言葉が引き起こす大いなる平安も ἐν τῷ κόσμῳ θλίψιν ἔχετε: ἀλλά θαρσεῖτε, ἐγὼ νενίκηκα τὸν κόσμον 「この世ではあなたがたには苦難がある。しかし勇気を出しなさい、私はこの世に勝っている」(ヨハネ16:33) という言葉の意味を帯びると言える。

「人々 ἄνθρωποι [英訳はmen]」と明示されている点にである²²。Bornkammは、このἄνθρωποιを「明らかに説教を通して物語に出会った人々を表わす」と解す²³。その上で、ここに「ペリコーペの場面設定の拡張と、その地平の拡幅」を見る。それはすなわち、「師に従う弟子が、試練と救助、嵐の危険と身の安全とを経験する姿の描写」から、「この姿に倣い、弟子となる」ことへ聴衆[ないし読者]を招くことへの拡張、拡幅である。

7. 個々のペリコーペの構成に着目することの重要性

以上で「嵐静め」に関する考察を終えた上で、Bornkammは当時の共観福音書研究が、「個々のペリコーペ、イエスのことば、イエスの行為を伝承の原初のデータと見る一方、個々のペリコーペの文脈、枠組みを二次的と見なす傾向」を取り上げる²⁴。そして、これに異議申し立てする意図でないと断った上ではあるが、いわば「修正提案」を提示する。すなわち、「『嵐静め』の事例から明らかのように、従来よりも、より注意深く個々の福音書が構成される動機について探求する必要がある」ということである。別言すれば、個々の福音書記者の編集の筆に、より一層注目する必要を提案するのである。ただし同時に、Bornkammはテキストの意味を受け取り損ねたり、確証される以上のことを読み込んだりしないよう注意喚起する。

8. Bornkamm の「編集史批判」の適用の限定性

一方で、少なくともこの時点でのBornkammは、福音書全体に「編集史批判」を適用することに旗を振ろうとはしていないように思われる。と言うのも、Bornkammは「嵐静め」で例示した「福音書記者の編集の筆」の分析によ

22 マルコ版、ルカ版では主語は明示されないまま動詞の3人称複数形が使われている。

23 *Ibid.*, p. 56。

24 *Ibid.*, pp. 56-57。

る成果の及ぶ範囲を個々のペリコーペに限定するからである。その背景には、「疑いなく、福音書記者たちは、かなりの程度ただ〔伝承の〕収集者として働き、比較的表面的な観点から（地理的データ、鍵語など）、しばしば伝承の個々の部分を配列した」という自身の理解がある²⁵。だからこそ、言わば例外的に見い出された「嵐静め」における「明確な神学的意図を示す証拠」が、「極めて意義深い」とBornkammは評価するのである²⁶。

9. 「嵐静め」の範例的側面

最後にBornkammは再び「嵐静めの物語」に戻り、ここには「あまりに軽率に弟子になるよう強要する者にイエスが警告する危険の描写」を見ることが許されると述べる。すなわち、イエスの弟子である故に経験せざるを得ない危機的状況があるというのである。しかし同時に、「悪魔的な力を支配し²⁷、神の βασιλεία をもたらす方として」、また「地上での結びつきを放棄するという第二の信託者の妨げとなったような犠牲を求めることも、その犠牲に報いることも、どちらも可能な方として」、この物語はイエスを示しているという。「この意味で、この物語は弟子としてイエスに従うことの危険と栄光を示す範例となっている」と述べてBornkammは、この論文を結ぶ²⁸。

10. Bornkamm の見解のまとめ

以上概観したBornkammの見解をまとめるならば、次のようになるう。

1. Bornkammは、マタイ福音書における「嵐静め」を対象とした短い論文に

25 これは、同じく編集史批判を展開したHans ConzelmannおよびWilli Marxsenが福音書記者の役割をより高く評価していることは異なる理解と言えよう。

26 *Ibid.*, p. 57。

27 *Ibid.*, pp. 57 n.1 は「ἐπιτιμῶν『〔風と湖を〕叱る』は悪魔的力の脅威を叱責する際の通常の表現」だと述べ、用例にマタ17:18//マコ9:25//ルカ9:42; マコ1:25//ルカ4:35を挙げる。

28 *Ibid.*, p. 57。

において、編集史批判と後に呼ばれる研究方法を初めて新約聖書学に適用した。

2. 福音書は、ナザレのイエスの伝記でなくケリュグマという観点から理解され解釈されねばならないし、その内容、様式、詳細部はイエス・キリストへの信仰に基づいて定められ形成された。こうした理解は様式史研究に負うところが大きい。
3. 教会の信仰によるいかなる種類の「上塗り」も無い純化された「イエスの生涯」を福音書から抽出することはできない。また、十字架刑を受け復活したイエスへの信仰は、伝承の新しい層では決してなく、そこから伝承が湧き出て成長した最も基礎となる場所である。
4. 原始キリスト教伝承には二つの特徴があり、一方では、イエス伝承を良心的に誠実に保存するための明瞭な労苦が見られ、他方では、この伝承が詳細部で特別な自由さを持つ。
5. 福音書記者はイエスの言動を伝える際に、ある種の教会の「古記録 archives」に遡ることなく、教会のケリュグマから引き、このケリュグマに仕えた。そもそも、イエスは過去の人物でなく、従って美術館の作品でない故に、そこにイエスが保存されているイエスについての原始キリスト教伝承の「古記録」はあり得ない。
6. 「嵐静め」(マルコ 4:35-41、マタイ 8:23-27、ルカ 8:22-25)の文脈は、マルコとルカでは「種を蒔く人」の喩え、「灯」の喩えに続く一方、マタイでは山上の説教の後に置かれた奇跡物語群の中にある。
7. マタイ版では「嵐静め物語」は「自然奇跡」であるだけでなく、他の福音書には無い新しい意味が特徴的な仕方の修正によって付与されている。それは文脈と「物語」に現れる鍵語ἀκολουθεῖνから読み取り得るもので「師に従う弟子のあるべき姿 discipleship」についての教えという意味である。「弟子たちがイエスに助けを求める呼び掛けの言葉」が、マタイ版のみ「人だけでなく神への尊称」である κύριε であることも、この意味を補強する。
8. マタイ版は、「弟子たちに対する非難の言葉」と「奇跡自体」の順序を入

れ替える。マルコ版、ルカ版の「奇跡 → 非難の言葉」からの変更により、マタイ版では、「自然の諸要素が沈黙させられる前に、従って死の恐怖の只中で、イエスの言葉によって弟子たちの小さな信仰が恥じ入らせられ、「師に従う弟子のあるべき姿」全般がそこに現れる典型的な事例としてここでの状況が捉えられている。

9. マタイの編集の筆は、ペリコーペ末尾で驚きの声を上げる主体が、マタイ版のみ「人々」と明示されている点にも見られる。この「人々」は、明らかに説教を通して物語に出会った人々を表わし、ここでの弟子の姿に倣い、弟子となることへと聴衆〔ないし読者〕が招かれている。
10. 「嵐静め」の事例から明らかなように、より注意深く個々の福音書が構成される動機、すなわち、個々の福音書記者の編集の筆に注目する必要がある。マタイは、単にこの物語を「受け渡す者」であるだけでなく、その最古の積義家であり、最初の解釈者でもある。「嵐の中での弟子たち」は「教会という小さな舟」と関連付けられている。ただし、テキストの意味を受け取り損ねたり、確証される以上のことを読み込まないよう注意が必要である。
11. 疑いなく、福音書記者たちは、かなりの程度ただ〔伝承の〕収集者として働き、比較的表面的な観点から（地理的データ、鍵語など）、しばしば伝承の個々の部分を配列した。だからこそ、「嵐静め」に見い出された「明確な神学的意図を示す証拠」は、例外的である故に極めて意義深い。
12. この物語は弟子としてイエスに従うことの危険と栄光を示す範例となっている。

11. Bornkamm の見解へのいくつかの指摘

Bornkammの方法論とその見解については、さらに次の点を指摘し得よう。

1. Bornkammの挙げる「原始キリスト教伝承の二つの特徴」は²⁹、私見では、

29 上述の「Bornkammの見解のまとめ」4参照。

興味深いことに、「口述伝承」の特徴としてしばしば指摘されるものである。いわく「基本的な忠実さと詳細部の自由さ」である。

2. Bornkammが「古記録」の存在自体を否定するのは³⁰、イエス伝承が伝達過程でその時その時のケリュゲマとして更新され続け、口述であれ文書であれ、目撃者証言としては、原形を留めていないと理解しているからであろうか。そうなるとBornkamm自身が「原始キリスト教伝承の特徴」の一つとして挙げる「イエス伝承を良心的に誠実に保存するための明瞭な労苦」の成果は、どこに見られることになるであろうか。
3. 福音書記者たちを「かなりの程度ただの〔伝承の〕収集者」で、「比較的表面的な観点から伝承の個々の部分を配列した」と評していることから³¹、少なくともこの時点でのBornkammは、福音書全体に「編集史批判」を適用することに積極的ではなく、「福音書記者の編集の筆」の分析による成果の及ぶ範囲を個々のペリコーペに限定している。従って、「編集史批判」の可能性については、なお限定的な理解に留まると言えよう。
4. Bornkammの「嵐静め」の考察ではキリスト論的要素が見過ごされているとの指摘がある³²。しかし、私見では、これは妥当な批判とは言い得ない。と言うのも、Bornkammは短い論文の末尾近くで、弟子になる覚悟について触れた直後に、「しかし同時に、悪魔的な力を支配し、神の $\beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\iota\alpha$ をもたらす方として、また従って地上での結びつきを放棄するという第二の信徒者の妨げとなったような犠牲をも求めることができ、また報いることができる者として、この物語は彼〔イエス〕を示す。」と確言している³³。ここには見過ごしようのないほど明瞭に、キリスト論的言明を看取し得るであろう。従って、Bornkammの論文は、「キリスト論的要素を見過ごしている」ので

30 上述の「Bornkammの見解のまとめ」5参照。

31 上述の「Bornkammの見解のまとめ」11参照。

32 Feiler, op. cit., p. 400, p. 406. W. D. Davies and Dale C. Allison Jr., *The Gospel according to Saint Matthew vol II The International Critical Commentary*, Edinburgh, T&T Clark, 1991, p. 69.

33 Bornkamm, op. cit., p. 57.

なく、むしろマルコ版にも見られるキリスト論的言明を踏まえた上での、マタイ版独自の「編集の手」に焦点を合わせたものと言い得よう。この焦点を絞った短い論文の中で、キリスト論的分析に多くの紙幅を割くことは、かえって焦点を曖昧にする恐れがあるとBornkammは判断したのではなかろうか。この点を勘案して、「弟子としてイエスに従うこと」に焦点を絞った点は、むしろ評価すべきだと思われる。

12. おわりに

今まで見て来たように、Bornkammは、「嵐静め」物語のマタイ版における文脈と用語の特徴に注目し、マルコ版およびルカ版のそれと比較することで、この物語におけるマタイの「編集の手」を明らかにし、さらにはマタイ版独自の「新しい意味」を提示した点で大いに評価できるであろう。マタイが、この物語を単に「受け渡す者」であるだけでなく、その最古の釈義家であり、最初の解釈者でもあることを論証した点も評価し得る。さらに、何と言っても、こうした分析の具体例を示すことで、後に「編集史批判」と呼ばれることになる研究方法の端緒となったことは、大いなる業績と言い得よう。

しかし一方で、Hans Conzelmann³⁴が、編集史批判によってルカ福音書全体を詳細に分析し、また Willi Marxsen³⁵も同じく編集史批判によって、マルコ福音書を部分的にはあれ分析したのに対して、Bornkammの分析は「嵐静め」物語に限定され、しかも編集史批判を積極的かつ広範にマタイ福音書に適用しようという展望も、少なくともこの時点では見受けられない。これは、自身が、この分析方法の成果の及ぶ範囲を極めて限定的に受け止め、しかも、福音書記者たちを、かなりの程度ただの伝承の収集者で、比較的表面的な観点か

34 H. コンツェルマン、田川建三訳、『時の中心 ルカ神学の研究』現代神学双書 28/新教出版社、1965年、原著第四版 1962年（初版は1954年）。

35 W. マルクスセン、辻 学訳、『福音書記者マルコ 編集史的考察』日本キリスト教団出版局、2010年、原著1959年 第2版（初版は1956年）。

ら伝承の個々の部分を配列したと評していることに起因するのであろう。喩えて言えば、せっかく莫大な埋蔵量のある鉱脈を探し当てておきながら、実際に掘ることには消極的な姿をそこに見ることができよう。あるいは目に見えない制約とまでは言えなくとも何か躊躇させるものがそこに生じたのであろうか。

いずれにしても、「編集史批判」の個々のペリコーペへの適用が、いかに豊かな使信を汲み出し得るかを端的に示したことでは、このわずか6頁の論文は、その分量の短さにもかかわらず、長きに渡って大きな影響を新約聖書神学に及ぼすことになったと言い得よう。